

環境報告書 2024



contents

- 2 編集方針
- 3 ごあいさつ / 環境方針
- 4 環境活動の紹介
- 5 環境活動の考え方
- 6 活動トピックス
- 10 フルハーフのばら
- 11 環境パフォーマンスデータ



編集方針

日本フルハーフグループの環境活動に関する考え方や取り組みについて、ステークホルダーの皆さまにわかりやすく報告し、ご理解いただくことを目指しています。それぞれの課題に対する取り組みをご覧いただき、ご意見・ご感想をお寄せいただければ幸いです。

対象期間

2023年4月～2024年3月(一部除く)

対象範囲

日本フルハーフ及び、日本国内連結対象子会社6社(一部除く)

発行時期

2025年1月(次回2025年12月予定)

お問い合わせ

日本フルハーフ株式会社 監査・環境保全室 環境保全グループ
〒243-0281 神奈川県厚木市上依知上ノ原3034
TEL:046-286-8870(直通)
<https://www.fruehauf.co.jp/>

ごあいさつ

2024年版の環境報告書をお届けします。

2024年は、能登半島地震、そして物流・運送業界の2024年問題、世界に目を移すとパレスチナ問題、ウクライナ紛争の長期化懸念など、いろいろな問題がおこっています。



代表取締役社長 田中 俊和

弊社でも徐々に回復基調にあるとはいえ、引き続き材料価格の高騰、シャシ不足など様々な外的影響を受けております。このような中で環境問題への関心はさらに高まり、昨今ではサステナビリティといった環境・社会・経済など多岐にわたる持続可能性が求められています。

今回、「環境報告書2024」の「環境トピックス」のコーナーではJapan Mobility Show2023で披露させていただいた私たちのトラック、トレーラなど製品に関する環境、安心・安全、新しいサービスなどの取組をご紹介します。

「想いをハコぶ その先へ」「未来をつくる 描き続ける。」これからも私達日本フルハーフグループは、将来に向かってお客様のご要望にお応え続ける企業グループであるとともに、環境問題などの社会的課題の解決に貢献する企業をめざし、挑戦し続けてまいります。

環境方針

日本フルハーフは、地球環境に優しい技術を常に追求すると共に、環境保全を十分に意識したトレーラ、バン型ボデー等の生産活動等を通じて、環境保護に率先して取り組み、豊かな社会の実現、維持に貢献します。

1. 環境に優しい製品の提供

生産活動、ならびに製品の提供においては、その環境課題に積極的に、且つ継続的改善をもって取り組むと共に、環境負荷の低減をめざし汚染の予防に取り組みます。

2. 環境保全の推進

全ての事業活動において、法規制の順守はもとより、社会の要求事項にも積極的に応え、環境保全活動に取り組みます。

3. 環境を配慮した事業活動の実現

全ての事業活動において、省エネルギー、省資源、グリーン調達、リサイクルに取り組み、さらには、これらを見直すことにより、かぎりある地球資源の保護に取り組みます。

4. より良い環境活動の実現

日本フルハーフ、及び関連会社全従業員が、地球環境保護の大切さを認識・自覚するよう、啓蒙活動に取り組みます。また、社会との調和・共栄をめざし、事業活動以外での環境活動にも取り組みます。

5. 環境方針の公開

本環境方針は、社外の要求、その他の必要に応じて一般に公開します。



環境活動の紹介

環境推進体制図

環境経営に関する活動方針は、社長、役員、各室・部から構成される「CSR環境会議」で審議・決定されます。

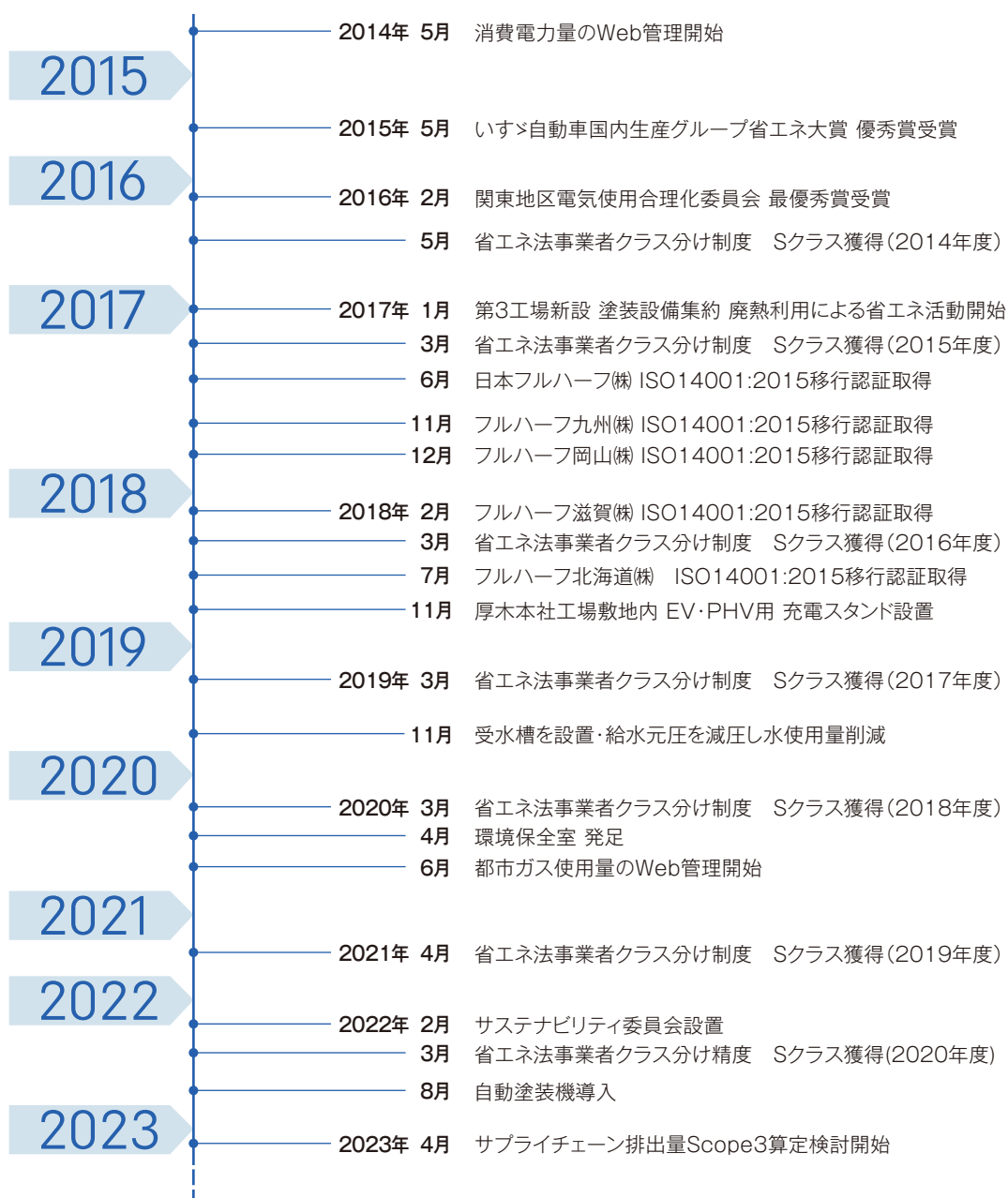
活動方針を基に、各室・部が環境保全について取り組み計画を設定し、実行できることから活動をしています。

各室・部には「環境・省エネ担当者」を置き、「環境・省エネ担当者会議」で議論することで活動推進のヒントにしています。その活動はエネルギー管理士を中心とする「省エネ推進部会」からエネルギー使用量の報告、エネルギー有効活用の提言があり、環境活動がより有効になるように工夫しています。こうした活動成果は、「CSR環境会議」でレビューされ、成果が出ているか確認し、今後の進め方について決定されます。



環境活動の沿革

※社名記載のないものは日本フルハーフ㈱を示す。



環境活動の考え方

世界は、以前より地球環境の変化に伴う社会への影響が議論されてきました。ここ数年は毎年のように世界各地で洪水被害や森林火災、食物の不作などが報告されています。これらは地球温暖化が原因と考えられています。これらの問題の程度は年々深刻さを増しています。

これらの問題は、私たち日本フルハーフグループも影響を及ぼし、また及ぼされているものです。このまま何もしないと、私たちの社会生活が維持できない、ひいては事業活動が存続できないといった事態になりかねません。私たちは「環境課題は私たちの課題」と認識しています。以下3つを「共通テーマ」と設定し、改善となる活動を、国内全グループで展開しています。



気候変動対応

日本フルハーフグループは、製品の生産に関わる活動の温室効果ガス排出量を把握しています。今後商品を社会に生み出す責任から、製品ライフサイクル全体における温室効果ガスの排出量を把握するところからはじめ、影響が大きいところは何かを見極めます。

そして、商品の開発から、生産、普及、廃棄に至るまでの間に、直接温室効果ガス排出量を減少させる活動に取り組みます。同時に、自然環境保護などの活動にもチャレンジします。



資源循環

日本フルハーフグループは、製品の生産に関わる活動の廃棄量を把握しています。今後はレベル1として、分別や歩留まり改善活動をこれまで以上に進めること、また処理をいただく事業者の技術を見極め、廃棄物が再資源化される余地を拡大していきます。

またレベル2として、開発段階などでの設計や材料見直し、製造段階などでの材料の再利用で排出量そのものを減らす活動、また使用された商品が再利用・再生部品となる活動にも取り組みます。

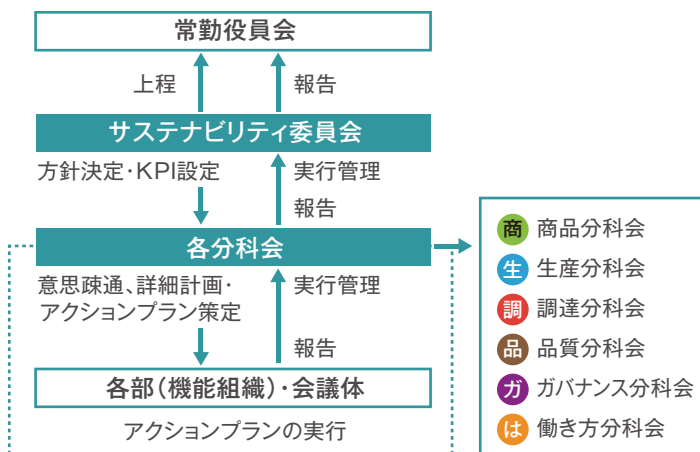


水資源保護

日本フルハーフグループは、事業所毎の水使用量を把握しています。今後は水資源について限りあるものと認識し、水使用量を減らす取り組みを検討します。また使用した水をきれいにして還す、また再利用できる余地はないか検討します。

サステナビリティ委員会の設置

日本フルハーフグループは100年に一度といわれる自動車の変革期を乗り越えるために、さまざまな対策を始めています。その一つとして中長期の課題解決のため、2022年2月1日にサステナビリティ委員会を設置いたしました。これからの世の中で当社が今後も生き残っていくためには、サステナビリティの考え方を経営レベルで取り込み、事業活動にもその重要な機軸の一つとして反映することが求められています。そしてこれらの考え方に基づいて経営戦略を立案し、事業活動を行うに当たっては全社横断的な機構が必要と判断したためです。これらの活動を通じて、「お客さまの想いをハコビ」、また今後の脱炭素社会の社会実現への貢献などを図っていく予定です。



活動トピックス

シャワーテスト場: シャワーポンプとアクアブラスターのインバータ化によるエネルギー使用量の削減 〈厚木工場 品質管理部 検査グループ〉



気候変動対応

架装ボデーの浸水検査で使用しているシャワーテスト場では、シャワーポンプで水を送り出しています。従来シャワーポンプはバルブの開閉によって流量調整を行っており、一定の回転数を保ったまま運転するため電力のロスが発生していました。電力のロスを減らすために、シャワーポンプ2台にインバーターを設置し、回転数を調整することで無駄のない流量調整が可能となりました。

また、浸水検査により出た水を循環再利用するためにアクアブラスター（水浄化装置）を2台設置していますが、こちらも併せてインバーターを取り付けることでエネルギー使用量を削減することができました。シャワーポンプとアクアブラスターのインバータ化により、エネルギー使用量は以前より約42%削減することができました。



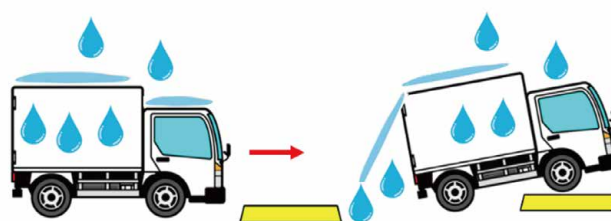
シャワーテスト場の水使用量削減 （出入口のスロープ設置による上水道からの補給量削減） 〈厚木工場 品質管理部 検査グループ〉



気候変動対応

シャワーテストによって使用した水は循環再利用をしていますが、シャワーテスト場外へ出てしまった分については、上水道から補充をしています。シャワーテストを行うと一部の水は検査車両の屋根に溜まり、回収できずにシャワーテスト場外に出てしまいます。

2024年1月にシャワーテストによって使用した水が場外へ出ないようにするために、出入口部分にスロープを設置しました。スロープにより検査車両の屋根に溜まった水もシャワーテスト場内でより多く回収できるようになりました。スロープ設置の効果として、従前と比べ台当たりの上水道からの補給量は約47%削減することができました。今後も水の再利用の検討を進め、節水に努めます。



活動トピックス

クリアホルダーの再資源化

〈監査・環境保全室 環境保全グループ〉



資源循環

2023年6月より、アスクル株式会社の「資源循環プラットフォーム（使用済みクリアホルダーのリサイクルバリューチェーン）」に賛同し、社内で再利用の難しい使用済みクリアホルダーの回収を始めました。回収した使用済みクリアホルダー（2023年6月～2024年3月で約3kg）は、アスクル株式会社の回収リサイクルのスキームによって資源化され、新しいプラスチック製品の原料となります。使用済みでも使用が可能なクリアホルダーは社内でリユースをしています。



産業廃棄物の分別

〈厚木工場 厚木総務室 総務グループ〉



資源循環

廃棄物の再資源化への取組みを継続して行っています。生産過程で発生した梱包ビニールやPPバンドのプラスチックは、廃プラスチックとして廃棄するのではなく、固形燃料といったサーマルリサイクルとして処理委託をしています。また、厚木工場の緑地整備を行った際、雑草やばらの剪定で発生した枝など廃棄していたものをリサイクルとして、たい肥化する外部業者へ処理委託をしています。今後も分別を徹底し、廃棄物を減らすためにリサイクル化を検討していきます。



レア金属のリサイクル

〈厚木工場 製造第二部 部品加工・テールゲートグループ〉



資源循環

切削加工に用いられる切削ビットには、レア金属（希少金属）と呼ばれる「タングステン（元素記号：W）」が含まれています。弊社の加工機にも切削ビットを使用しており、日々金属加工を行っています。切削加工を繰り返すうちに切削ビットは摩耗し交換が必要となります。以前は他の金属と同じく「金属くず」の産業廃棄物で処理していましたが、レア金属（希少金属）ということもあり、現在はリサイクル業者へ回収を依頼しています。年間排出量としては少量ですが、地球資源保護のため今後も継続していきます。



活動トピックス

ノーマイカーデーの推進

〈厚木工場 製造第二部 材料・部品管理グループ〉



水資源

Scope3(サプライチェーン全体での排出)カテゴリ7(雇用者の通勤)によるCO₂排出量削減を目的に、2023年4月より部門の環境活動の取り組みとして、スマートムーブ(日常生活の移動手段を工夫しCO₂排出量を削減する活動)の取り組みを始めました。マイカー通勤者を対象に月1回／人の目標で、徒歩や公共交通機関を利用しての通勤に挑戦しています。2023年度は、約0.5ton-CO₂の削減に貢献することができました。CO₂排出量削減のみならず、体を動かす健康推進にも繋がる活動です。会社全体として健康増進に取り組んでいきます。

実施者からは、始めた当初は義務的に活動していましたが、企業対抗ウォークラリーのイベントが始まり、やる気がわいてきました。今では早朝に近所を歩活(あるかつ)するのが趣味になりましたとの感想もありました。

「移動」を「エコ」に。

smart
move

部品デポへのモーダルシフト

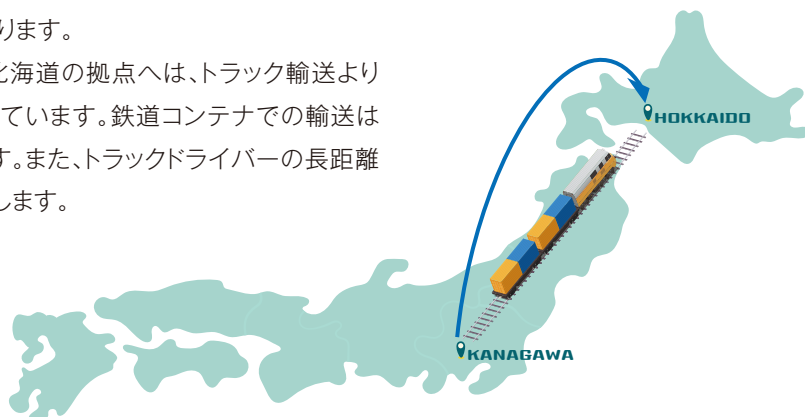
〈部品部 部品業務グループ〉



水資源

弊社には、部品のデポ(小型物流拠点)が2箇所にあります。

修理部品などの輸送を行うにあたり、デポのある北海道の拠点へは、トラック輸送よりCO₂排出量の少ない鉄道コンテナでの輸送を行っています。鉄道コンテナでの輸送はトラック輸送よりCO₂排出量が約70%削減されます。また、トラックドライバーの長距離運転の削減にも寄与するなど、働き方改革にも貢献します。



電動式牽引トラクターの採用

〈厚木工場 製造第二部 部品加工・テールゲートグループ／技術部〉



水資源

軽油燃料の長尺材運搬用サイドフォークリフト1台を電動式牽引トラクターに切替えました。導入にあたっては、作業位置や作業方法を変更採用しました。また、以前採用した「アオリ搬入横移動引き込み装置」という生産場所に部品を配置する装置の横展開として規模を小さくした「長物搬送台車搬入出用 横移動装置」も導入しました。

電動式牽引トラクターは、サイドフォークリフトに比べ、CO₂排出量を年間約2.4 ton-CO₂削減できると見込んでいます(長物搬送台車搬入出用 横移動装置分含まず)。同時に、サイドフォークリフト運用時に課題のあった狭い通路・屋内での排気ガスの排出や、荷役部への作業者の接近が無くなり安全性が向上しました。



活動トピックス

環境に優しい製品の取り組み



気候変動対応

Japan Mobility Show 2023 出展



当社は、東京ビッグサイト(東京都江東区)で開催された「JAPAN MOBILITY SHOW 2023」に出展。テーマは「サステナブルな未来を共にデザインしてみませんか?」。当社ブースでは、環境・安心安全・新しいサービスの分野に注力した車両を展示しました。

フルハーフのサステナビリティ



環境



安心・安全



新しいサービス

カーボンニュートラル社会の実現に貢献し、持続可能な社会の構築を目指します。そしてモビリティで未来をつなぐために、上記の3つの分野に注力していきます。

1 販売中



ゲート安全柵 & ラインライト

2 参考出品



引出式昇降ステップ

3 販売中



ステップ & アシストベルト

4 参考出品



ダブル連結トラック対応フルトレーラ

5 販売中



フルハーフコネクト

6 参考出品



セーフティーコーナーライト

7 参考出品



グリーンボデー

8 参考出品



トレーラブレーキ温度監視システム

環境面

- ・ダブル連結トラック対応のフルトレーラ
従来の単車トラックと比べてCO₂排出量を40%削減し、ドライバーの負担を半減。積載量が約2倍となり、2024年問題にも対応。
- ・アルミニウムボデー「グリーンボデー」
トラックボデー業界初となるアルミの水平リサイクル※で製造したボデー。CO₂排出量を約8割削減。
※使用済み製品等を原料として用いて、再び同じ種類の製品を製造するリサイクルのこと

安心安全面

- ・テールゲートリフター安全柵、ラインライト、引出式昇降ステップ、セーフティーコーナーライト

新しいモビリティサービス

- ・「フルハーフコネクト」
車両の位置情報、運行状況、気象情報などがタイムリーに把握できるサービス。

外装・内装のペインティング

- ・フルハーフの本社がある厚木市の出身であるアーティスト井上純氏によるカラフルなボデーの外装とフルハーフカラーの内装は、フルハーフの新しいチャレンジを表現。

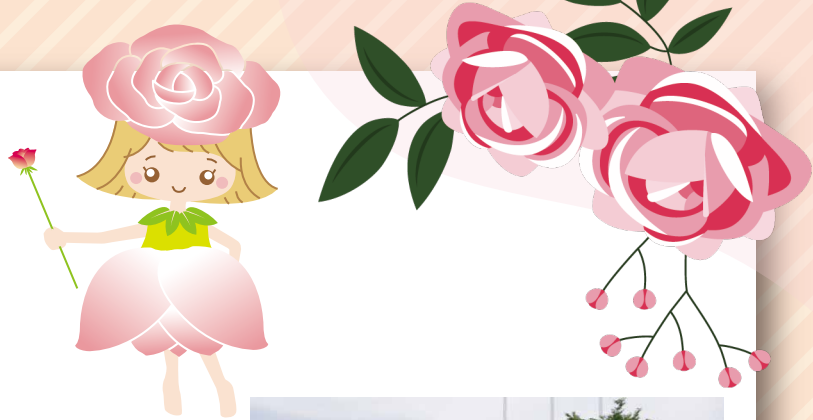
一般社団法人日本自動車車体工業会「環境基準・新環境基準適合ラベル」

「環境基準適合ラベル」「新環境基準適合ラベル」とは、一般社団法人日本自動車車体工業会が制定した、使用済み架装物の解体作業の容易化を図り、再生資源の利用や適正な処理を促進する「環境にやさしい車体」であることを証明するものです。商用車架装物に関する自主取組み項目を定め、その内容を満たす商用車架装物には、それぞれのラベルを貼り付けしています。

弊社製品は新環境基準(ゴールドラベル)に適合しております。



フルハーフの ばら



第37回ばら観賞会を開催

2024年5月、構内の400種を超えるばらが鮮やかに咲き乱れる中、ばら観賞会を開催し約8千人の皆様にご来場いただきました。様々なイベント開催の中には、スペシャルゲストとして車いすラグビー選手池崎大輔氏をお迎えし、トークショーや車いすタックル体験会が行われました。その他のイベントではカフェ、フォトコンテスト、ばらの切り花や苗木の販売、お楽しみ抽選会など多数開催しました。イベントの収益金の一部は令和6年能登半島地震支援募金として寄付しています。

(*日本軽金属HD株式会社(弊社親会社)は「池崎大輔オフィシャルパートナー」です。)



小学生の工場見学受け入れ

2024年2月、小学5年生98名の工場見学を実施しました。

同小学校よりご依頼を受け、小学校高学年で学習する「ものづくり」をテーマに、社会見学の一環として実施されました。街中を走る身近なトラックがどのように製造されているのかを実際に目で見て体感することで、学習内容をより深く理解し、ものづくりの面白さや奥深さを実感してもらう良い機会となりました。また、従業員の仕事へのモチベーション向上にも繋がりました。小学生の工場見学受け入れは継続的にを行っています。

佐賀県神埼市へドライバンの寄贈

2024年3月、地域社会への貢献活動の一環として、佐賀県神埼市が進める城原川ダム事業の影響を受ける地域の活性化を支援することを目的として、ドライバンプデーを寄贈しました。地域のイベントである「かかし祭り」で使用する案山子や、登山道の整備に使用する用具類の保管などに活用されます。また、近隣の保育園児さんたちが描いた橋や公園、地元のお祭りなどの絵をシートに印刷し、寄贈品のドライバンプデーに飾り付けをしてくれました。



丹沢の森林再生活動のボランティア継続

毎年4月、10月にNPO法人 丹沢自然保護協会主催の植樹活動に社内ボランティア活動として、2022年4月より継続して参加しています。弊社近隣の森林を育成し相模川水系の水源を保護し、健全な生態系と生物多様性を維持するために、引き続き取り組んでいきます。

構内ばらの木でメジロが巣作りと巣立ち

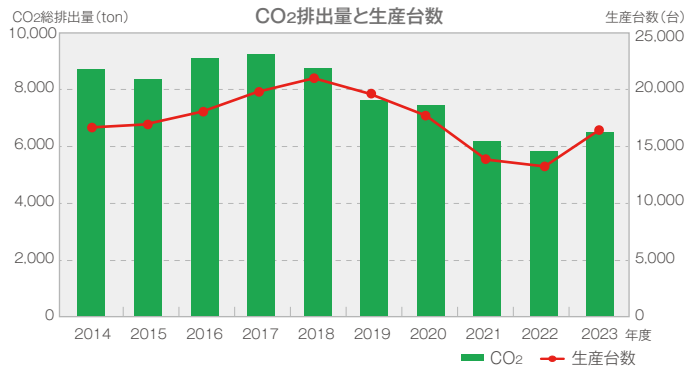
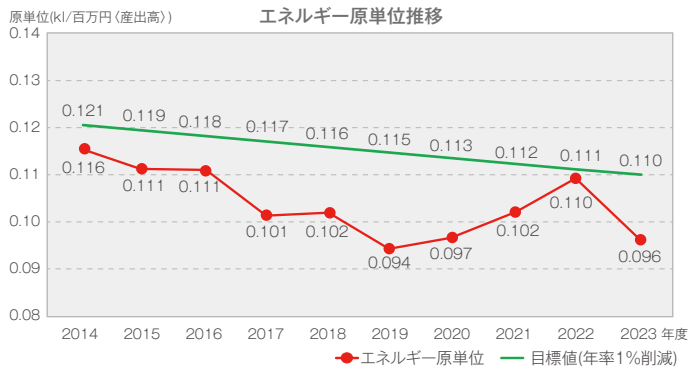
2024年5月、構内のばらの木にメジロが巣を作り子育てをしていました！
雛4羽、発見から12日間程で巣立っていきました。
とても可愛らしかったです。



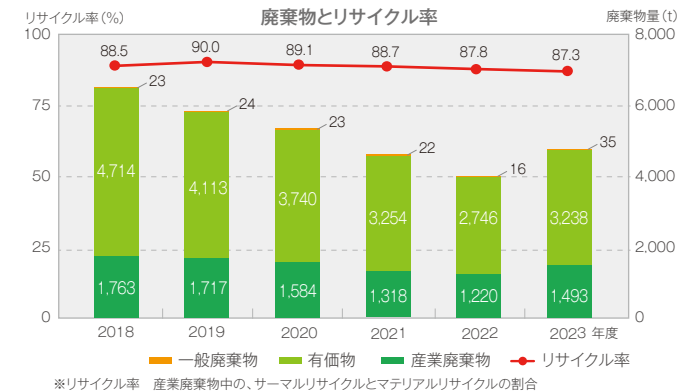
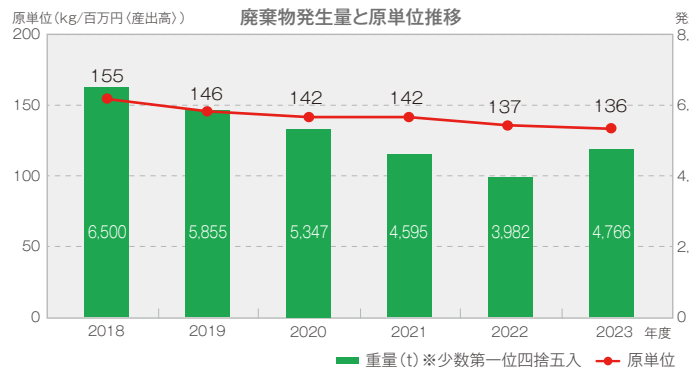


*本ページのデータは全て日本フルハーフ㈱の活動

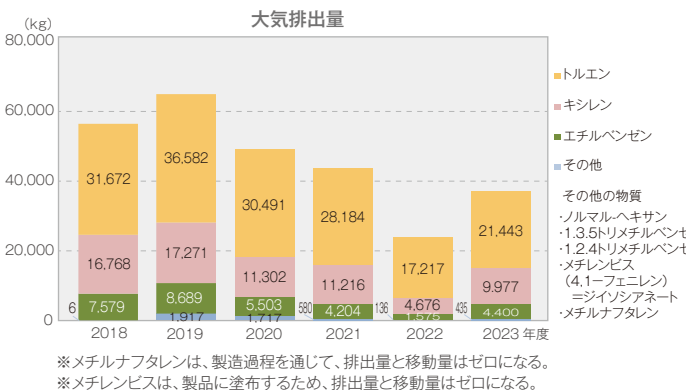
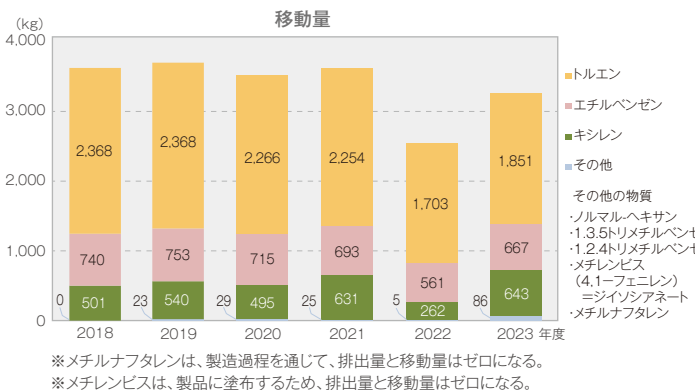
エネルギーとCO₂



廃棄物



化学物質管理



環境保全コスト

(百万円)

分類	2022年度		2023年度		主な取り組み
	投資額	費用額	投資額	費用額	
(1) 事業エリア内コスト	32.4	143.3	13.1	155.5	—
内訳 (1) — 1 公害防止コスト	4.7	22.6	2.5	23.9	排水・排ガス処理施設
(1) — 2 地球環境保全コスト	27.7	16.7	10.6	18.2	省エネ設備
(1) — 3 資源循環コスト	0.0	104.0	0.0	113.4	産業廃棄物量処理
(2) 上・下流コスト	0.0	0.0	0.0	0.0	—
(3) 管理活動コスト	7.6	32.6	0.4	30.0	ISO維持、事業所内緑地整備
(4) 研究開発コスト	0.0	39.1	0.0	37.2	環境配慮製品開発
(5) 社会活動コスト	0.0	0.3	0.0	2.8	ばら鑑賞会実施
(6) 環境損傷対応コスト	0.0	0.0	0.0	0.0	—
合計	40.0	215.3	13.5	225.5	